



私が幼児教育を志した頃(9)

津守 真

昭和二十四年には、私はすでに幼児の発達と教育の仕事に入っていた。

その出発点で、はからずも障害をもつ幼児と出会った。当時は精神薄弱児とよばれ、何も分からない特殊な子どもと考えられていた。その呼び名はその後、精神発達遅滞児、知恵遅れ、障害児、などさまざまに変わり、現在は知的障害児と言われている。私はいまは「障碍」と書く。「害」は害毒の害であるが、「碍」は、さまたげになる石という意味である。妨げになる石を目から取り除けば障碍ではなくなる。あれから五十年の間に私はこの子どもたちに教育されて、いまは疑わずに「障碍をもつ子ども」と書く。コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの幼児教育は、この子たちを含めたすべての幼児のためのものである。



障 碍 を も つ 幼 児 の た め の 特 別 保 育 室 の 準 備

障 碍 を も つ 幼 児 の た め の 特 別 保 育 室 を 私 が 始 め た の は、 数 え る と 今 か ら 五 十 年 前 の こ と で あ る の に、 私 は そ こ か ら 発 展 し た 養 護 学 校 と 現 在 も か か わ っ て い る の で、 特 別 保 育 室 の 開 設 は ま る で 昨 日 の こ と の よ う に 感 じ る。 そ の 頃 の 幼 児 は い ま や 五 十 歳 を 越 え、 い ま も 交 わ り を つ づ け て い る 親 子 も 少 な く な い。 そ の 間 に 社 会 の 考 え 方、 行 政 の 指 導 方 針、 専 門 家 の 考 え も 幾 変 遷 し、 そ れ が 親 子 の 運 命 を 変 え て き た こ と を 思 う と、 現 在 も こ の 仕 事 の 原 点 に 立 ち 返 っ て 考 え る 必 要 を 感 じ る。

私 が 愛 育 研 究 所 の 特 別 保 育 室 を 再 開 し た の は 昭 和 二 十 四 年 六 月 八 日 だ が、 そ こ に 至 る 一 カ 月 の 間 に 私 の 身 辺 で 起 こ っ て い た こ と を 私 の 日 記 か ら 引 用 し な が ら、 解 説 を 加 え た い。

昭 和 二 十 四 年 五 月 十 九 日 (木)

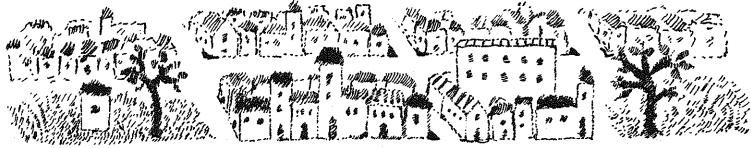
「 朝 寝 坊 を し て い る と こ ろ を、 心 理 学 の 友 人 の T 君 に 起 こ さ れ、 今 日 面 接 す る 子 ども に つ い て 打 ち 合 わ せ を し た。 い つ も よ り 遅 く に 研 究 所 に 行 き、 一 人 の 乳 児 を み た。 こ の 子 は 一 月 半 ほど 体 重 が 増 加 し な い が 精 神 発 達 は ノ ー マ ル で あ る。 こ の 後、 身 体 的 精 神 的 に ど う 変 化 し て ゆ く か 興 味 深 い。 間 も な く 五 歳 六 カ 月 の 男 児 の M さ ん が 来 た。 聡 明 に 見 え る 可 愛 ら し い 子 で、 挑 む よ う に 私 の 顔 を 見 て 足 を 踏 み 出 し、 声 を 出 す。 幼 稚 園 で 他 の 子 と 遊 べ な い の で み て ほ し い と 母 親 が 連 れ て 来 た の で あ る。 前 回 母 親 に 頼 ん



でおいた家庭の記録と幼稚園の記録と、製作品をもって来てくれた。発達調査の結果は、発達年齢三歳六カ月である。この子の言語の異常は知能からくるのか、運動機能あるいは社会性の遅れからくるのか疑問をもった。つづいて双子のTさんの母親が来て、特別保育室の申し込みをした。母親の熱意に動かされるとともに、今後の責任の重大さを痛感する。」この頃は教育相談はどこにもなかったので、心理学の友人たちはよく愛育研究所に集まっていた。「言語の異常は知能からくるのか、運動機能あるいは社会性の遅れからくるのか」と記しているが、いまだったら自閉症と診断されただろう。当時は自閉症という語は未だなかった。「夜、岡部弥太郎先生宅を訪問。西本脩さんと一緒に英文翻訳の手伝いをする。その帰りに高等学校の友人に会い、同級の真鍋君の戦死の公報がはいったことを聞いた。感無量。」

昭和二十四年五月二十日（金） 雨

「精神薄弱児施設T学園に、研究所のスタッフ数人と見学に行く。雨が本降りになった。暗い感じを受ける収容施設である。もつと良い教育の場が考えられねばならぬ。保母さんが貧弱である。そのことについてスタッフと話し合いながら帰った。私は大きな目で見える心が欠けているとスタッフから批判された。もつと大きな目で見れば、人の悪点は消えて良い点が浮かび出るはずである。夜、コルヴィヌス『発達障害児』第二章を読む。」精神薄弱と診断されると、この子たちは結局は収容施設に送られるのかと思うと、私はがっかりした。こういうのとは全く違う考え方が作れな



いかと考えた。私がやろうとしていた特別保育室は、一番陽当たりの良い、明るい部屋にしたいと私は主張した。幸いなことに、私共の特別保育室に予定されていた教養部長室は三階東南の角部屋で、日当たりの良いバルコニーがついていた。

昭和二十四年五月二十一日（土）

「生後五カ月の乳児の相談を受け、発達検査をした。九カ月早産で、身長と胸囲が普通より小さい。神経質な印象を受けた。午後は日比谷のCIE図書館に行き、カーマイケルのマニユアル・オブ・チャイルド サイコロジの中にもドルが書いた『フィール・ブルマインデッド（精神薄弱児）』の章を二十ページ程読んだが、精神薄弱児教育について一層悲観的になってしまった。少しく疲労を覚え、何もする気がしない。明日の矢内原先生の聖書講義に期待を感じると共に恐怖を感じている。」

当時は児童心理学の書物でも精神薄弱児というと、普通の子どもとは違う特別の心理があるとの考えが一般的で、その分野に踏み込もうとしている自分を考えると、気が重かった。接すれば可愛い幼児なのに、違う種類の子どもとは私には考えられなかった。

昭和二十四年五月二十二日（日）

「今井館聖書講堂で矢内原聖書講義は『心の悪』という題目だった。

恐怖は善き行いを萎縮させ、感謝は善き行いを刺激する。神は愛であり、喜びの神であると言う方が信仰を生産的にするという趣旨の講義だった。『小事に忠なる者は



大事に忠なり」という聖書の箇所の矢内原の注釈である。

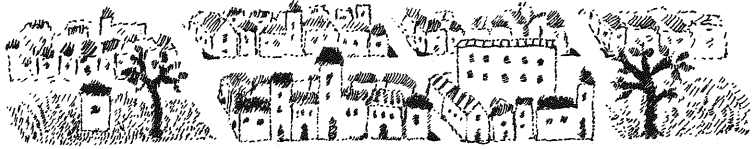
午後はいつものように日曜学校で子どもたちと遊んで心を洗われた。」

昭和二十四年五月二十三日（月） 雨

「朝から日比谷のCIE図書館にゆき、マニユアル・オブ・チャイルド サイコロジの『フィープルマインド（精神薄弱児）』の項を読了。たいして啓発されるものはなかった。それよりもゲゼルの新刊の『デイヴェロップメンタル・ダイアグノシス（Developmental Diagnosis）』に興奮した。彼の数十年にわたる苦心の結晶である。このような仕事に対する情熱が駆り立てられる。こういう仕事を私もしたいものだ。昼少し前に研究所に行き、昼食後幼稚園で一時間ばかり遊ぶ。夜、コルヴィヌスを読む。落ち着いた面白い書物である。」ゲゼルの研究は知能検査とは異なり、乳幼児の発達の細かな観察に重点がある。後に私は日本の子どもの生活場面での観察による「乳幼児精神発達診断法」を著したが、戦争中もたゆまずに続けられていたゲゼルの研究に触発されたのである。そのひとつひとつの行動の意味を私が考えるようになったのは更に後である。

昭和二十四年五月二十四日（火） 曇ったり晴れたり

「午前中、渋谷区役所と赤坂区役所を回り、昼に研究所に行く。今日は一日こうして過ぎた。特別保育室の開設期日は迫ってくる。」特別保育室開設にあたって、区役所で就学猶予、免除の児童名簿を調査することを私は命じられた。経営の見通しのため



にはそれが必要だろうが、いま教育相談に来た子どもたちが通う幼稚園がないのだから、その切実な要望に答えることが緊急だと私は考えていた。発達が遅れているからといって、幼稚園から断られるのはおかしい。そういう事実に出会うと自分が拒否されたように感じてしまう。幼児はたちまち大きくなるから、制度がどうであれ、この子が幼児のうちに、幼児にふさわしい保育の場を用意しなければならないというのが保育者のセンスだと思う。

昭和二十四年五月二十五日（水） 快晴

「朝、スキッピー（犬の名前）について来られて迷惑する。Mさんが研究所に来て、午前一杯かかってしまった。母親はきわめて熱心で、特別保育室に申し込んで行った。ますます責任を感じるが、張りが出てきた。午後から赤ちゃんが来た。十月月だが、発達指数65である。身体発達は二カ月以上進んでいる。特別保育室の経費を計算したが非常に苦しい。最初から難航である。」

スキッピーは、接収されていた私の家に新しく住んだ米国陸軍大佐ドナルドソン家で飼っていた犬である。私の家から愛育研究所まで、当時はバスもなく、片道三十分以上歩いて行くよりほかなかった。スキッピーはよく私のあとをつけて来て、困らせていた。

昭和二十四年五月二十八日（土） 曇り後晴

「午前中に二人知能の遅れた子どもをみる。ひとり九歳、IQ56。父親が連れて



来た。何とかならないかと訴えられた。大和田小学校を紹介し、小児科に回した。もうひとりとは四歳三カ月で、I Q 75である。」この頃、都内の特殊学級はこのほか、神竜小学校、金竜小学校、その他一、二校があるのみだった。勿論、養護学校はまだなかった。

日本保育学会第二回大会

昭和二十四年五月二十九日(日) 晴

「今日は、日本保育学会の研究発表会に行くか、あるいは矢内原先生の聖書講義に行くか、前から迷っていたが、結局保育学会に朝から行った。私は一生懸命に集中して聞いた。いろいろの発表を聞き、保育ということの性格がだいぶ分かったように思う。だが実際にこういう仕事をしようとしている自分を考えると、学問とは縁遠いように思えて、自分が惨めに感じられたのは何故だろうか。しかし夕方までじっくりと聞いているうちに、だんだんに元気を回復した。学問と矛盾しない道もある。それはやり方によるのだ。子どもは心理的に社会的に生物的に、また教育の対象としてあらゆる面からみてゆかねばならない。終了後、会場の整理を手伝って、お茶とお寿司を御馳走になり、西本君ほか数人としゃべった。帰途牛島先生と一緒にあった。」

この日は第二回日本保育学会大会で、会場は東京女子高等師範学校―現お茶の水女子大学―附属幼稚園遊戯室だった。発表数は七で、参加者は遊戯室に入る位の人数



だった。いまでは考えられないくらい、保育というのは一段と低く見られた時代だった。そういう風潮の中で、その分野に入ろうとしている自分が惨めに感じてきたのだと思う。しかし、やり方によっては学問と矛盾しない道があると直観的に考えたその直感に、保育にかかわる学問の遍歴をいくつも経て来た現在、間違っていないかと思う。あの頃の実践者たちは、いま思うと立派な保育をしていた。当時の私には、実践の中から生み出す保育学が未だ見えていなかった。

特別保育室開室

昭和二十四年六月八日（水） 雨

「午前中保育の準備。午後から第一回保育。」

在籍者は四人だったが、この第一日には双子の二人が欠席だった。こうして、週二日、研究室での保育が始まった。子どもの数はじきに増えていった。三階の研究室では不便なので、数カ月後には階下の幼稚園の保育室を週二日、午後使わせてもらうことになった。この間のことを思い出すと、保育の実践としては現在私がやっているのと大差はなかったように思う。すぐには部屋に入らない子どもがいて、私はその子と並んで、子どもがほんのわずか足を前に出すと私も子どもの動きに合わせて足を出し、少しずつその子は部屋の真ん中に歩いて来た。そんなとき、保育経験のあるスタッフは、部屋に入るときには靴を履き替えさせなければいけないと主張した。靴を



履き替えさせているうちに子どもは気持ちが変わって動かなくなることは自明なのに。最初からこんなコンフリクトがいくつもあった。

このようにして、ともかくも二学期、三学期と過ぎて、昭和二十五年三月二十五日に、お客様を招いて一年目の修了の会をした。心理学の友人たちが何人も来てくれた。東洋英和女学院からスクールトン先生が来られて、これは日本の教育の基礎となる仕事だと励ましの言葉を述べてくださった。愛育研究所長の斎藤文雄先生は、文化国家日本にふさわしい仕事と励まされた。

あの初期の時代にこの仕事に関心をもった一握りの人たちには、この子たちが幼稚園や学校から拒否されるという、こんなことがあつていいのかという怒りがあつた。また、この子たちのために、保護する場所を作りたいという親心と熱意があつた。障碍をもつ子どもの仕事のその後に言及するといくら紙数があつても足りない。これまで私自身いくつも書いてきたし、日本保育学会「保育学研究」第三十六巻第一号「展望―幼児保育から見た障碍の意味とその歴史的変遷」に概要を記したので、あわせて読んで頂きたい。

倉橋惣三先生宅訪問

昭和二十五年五月九日（火） 晴

「倉橋先生宅訪問。」かなり以前から、愛育研究所小児科の平井信義さんと私は乳児



室で一緒に仕事をしたり、語り合っていた。平井さんは私に倉橋先生に会ったことはあるかと尋ねられ、今度一緒に訪ねようと約束していた。それがようやく実現し、中野駅に近い千光寺町のご自宅を平井さんと訪問した。この後は何度もお宅を訪ねる事になったのだが、倉橋先生はいつも茶系色の和服に兵児帯で、温顔で迎えてくださった。この最初の訪問のとき、私は特別保育室のことを話したと思う。先生はそのことに非常に関心を示された。私は矢内原先生のことなども話した。先生自身内村鑑三の聖書講義のメンバーであったこともあり、そのことにも話は及んだ。その日の印象を私は日記に次のように記した。

「この子どもは、この子どもだ。私は私であり、あの人はあの人。この人はこの人。あなたはあなたである。将来どうなるか、そんなことは分からない。神様の御手に委ねなければならぬ。」先生がこのように言われたのかどうかは確かでないが、先生はひとりひとりの人を独自の人格として接せられた、その印象である。

先生は障碍をもつ子どもに深い関心を寄せておられ、この年の秋に私が小さな保育室を建築したとき、自分はないとできないがと言って、五円を紙に包んでくださった。当時の五円は大金である。私はそのお金で靴箱を買ひ、カルテボックスを大工さんに頼んで作ってもらった。先生の句に「はいれない子にも薫れや梅の園 園丁」というのがある。こうして、倉橋惣三先生と私との間の長い交わりが始まった。